

二席 沖縄県文化振興会 理事長賞

歌劇「あだ花」

屋良 美枝子

人物表

- オミト（19）才 嘉手納屋良村に住む、百姓夫婦のひとり娘。村でも評判の美童。
- カマデ（21）才 オミトの許婚で、誠一筋の好青年。幼くして父親を失くし、病弱の母を抱え心労が絶えない。
- 金松（28）才 首里から、視察にやって来た里之

子。妻子がありながら、オミトに横恋慕して騒動を起こす。

- 三良（32）才 金松の下男。
- 太良（43）才 オミトの父親。
- ツル（40）才 オミトの母親。
- ナベ（42）才 カマデの母親。
- 地主（51）才 カマデの畑の地主。

梗概

嘉手納屋良村に住むオミト（19）才とカマデ（21）才は、幼なじみで将来を誓いあった仲である。愛々と暮っていたある日のこと、首里^からやって来た里之子・金松（28）才が、偶然出会ったオミトに横恋慕

してしまふ。何とか彼女を手に入れたい金松は、下男・三良（32）才を巻き込んで画策する。

病弱な母親を抱えるカマデの足元を見て、病気の治療費や地代をすべて肩代わりしてやるから、オミトから手を引けと言う。そして、この事はオミトを始め誰にも口外しない事が、絶対条件だと言い放つ。

考えに考えた末、カマデは金松の提案を受け入れることにした。母親のツル（42）才が、自分が病弱のせいでカマデの手枷足枷になり生きていく価値がないと、泣いてカマデを困らせるのである。その母親の為、仕方なく苦渋の選択をするカマデ。

何も知らないオミトは、カマデの突然の心変わりに驚き床に伏せてしまふ。そこへ、何食わぬ顔で金松が毎日のように訪れ献身的に尽くす。ふた月が経ちついにオミトは、金松の情にほだされ結ばれることに。

半年後、あんなに神が定めた運命のふたりだと言っていた金松が、長男誕生の知らせを受けて、オミトにひと言もなく首里に帰ってしまっ

た。再び病の床に就くオミト。

数週間後、オミトを心配して三良が訪ねて来る。金松に妻子がいる事、長男が誕生して首里に戻った事を伝え、詫びるのであった。そして、カマデの突然の心変わりが、金松の画策だった事も白状した。

どんな事情があったにせよ、仇し縁の金松とあだ花を咲かせてしまった自分を激しく責めるオミトに、これまでの事はすべて水に流して、もう一度やり直そうと切望するカマデ。それを後押しするオミトの父と母。オミトも赦しを乞い、ふたりは縁を結び直すことを誓うのであった。

第一幕

十八世紀。嘉手納屋良村。

比謝川のほとり。

オミト（19）才が洗い物のカゴを手に、
カマデ（21）才はクワを肩に、
ふたり手を取り下手より登場。

《地謡・マミドーマ》
愛々かなかなと踊るオミトとカマデ。

〈イサヘイヨー〉

オミト えー阿兄小あひぐあ。汝とう我とお幼少くわうさる頃に、
名付きらつていかりくり十年ぬ年月ん余
ていどううんどお。

カマデ あんやさなあ。私達あんまあが身体弱さ
ぬ、今なまでいなるまでい待ちかんでいし
てい、汝ねえ済まんてい思とおさ。

オミト えー阿兄小。うぬ事少ちつとうん気に掛き
てい呉るな。親ぬ孝すし子ぬ務みどお。う
り咎みる人ぬ居なまんなあ。

カマデ ウミトウ小。誠果報し今ぬうぬ言葉。汝
が情の深さや、一期何時いちん胸に染みらな。

〈テンサー節〉

オミト あんどうんやりば、えー阿兄小。明きてい
春ぬ三月に、佳かる日選でい夫婦になや
親ぬ孝ん果たさな。

カマデ 春ぬ佳かる日勝る日に夫婦になやいうぬ後
や、一期何時迄ん暮ちいかやあ互えに。愛々とう小。
オミト 言ちやんどーやあ。えー阿兄小。
カマデ 変わんなよーやあ。ウミトウ小。

二人 鴛鴦ぬ契りあぬ世迄ぬ契り、忘んなよーやあ。

（台詞）

オミト 言ちゃんどお、阿兄小。うり忘れていから、只あ合点さんどお、我ねえ。

カマデ 分かとおさ、心配あさんけえ。

オミト 本当やらやあ？

カマデ あい。本当どーんでえ。

オミト 本当に本当やらやあ？

カマデ あぎじえ。何回言い返さーしえ済むが。何ん心配さんていん済むんどーんでえ。

オミト （ようやく安心する）

カマデ あいだあ。くま居ていウンタクするうち
に、風バーバーさぎいるむんなあ。急ぢ畑はる

仕事片じきてい来うくと、う汝ん洗い物早く済まち、
気注ちきてい帰りよーやあ。

オミト 阿兄小ん、油断さんぐとう戻りよお。

カマデ あんせえ、一足早ちゆひさーみてい行じ来うひい。

カマデ足早に下手に去り、オミトは手拭いを姉さん被りにして、川べりで洗濯を始める。

そこへ、作付けの視察に首里から来た里之子・

金松（28）才が、下男・三良（32）才を従え上手から登場。

三良手に凶面を持つ。

（台詞）

金松 三良よ。

三良 ふーっ。何でーびるが、御旦那さい。

金松 此処くまりかーや、比謝川ぬ側なていがやら、作る毛作いん良う出来とーんねえするむんなあ。

三良 あんさびーぐとう。

金松 だあ。凶面とう当てていんだ。

三良 （手にしていた凶面を金松に渡す）

金松が凶面を片手に調査にかかろうとしたその矢先、突然の風にあおられ凶面が川の方へ飛ばされてしまう。

それに気づいたオミトが、着物の裾を濡らしながらその凶面を拾う。

姉さん被りを解き、手拭いで凶面の水気を払い金松に手渡す。

その美童の美しさに思わず一目惚れしてしまう金松。

金松 此りや果報し。

オミト （黙ってうなづく）

金松 此り失いねえ、仕事に障さいぬ有つとうくる、誠に果報し。やしが、汝着物ぬ裾や濡でいとーんねえすが、ちけー無えらに？

オミト うぬあたいや何んあいびらん。

金松 あねえ言しが……。

オミト どーでいん、御仕事続きていうたびみせーびり。

一札をして洗い場に戻って行くオミト。

胸に手を当て見つめる金松。

〈せんだん木〉

金松 如何しちやる事が、ありに見ゆるあぬ無蔵
ゆ、天から神ぬ降りてい来んねえ。吉屋チ
ルーん、今帰仁ぬ御神加那志やていーん、
ありに比較れー色ん抜きゆさ。牡丹・芍薬・
百合ぬ花、束になていんあぬ無蔵ぬ、色香
に勝る花ぬ有るまじ。何やらわん良さ、咲
ち誇る花や、手折てい側に飾てい見欲しや。

（台詞）

金松 三良よ。三良。

三良 ふーっ。何でーびるが、御旦那さい。

金松 ありに見ゆる美童に、我が先程ぬ御褒美取
らすくとうんでい言ち、急ぢ此処んかい連

てい来うる如し。

三良 （独白）アリアアリ。又始またるむん。

金松 何やんでいが？

三良 何ん有いびらん。有いびらんしが…。

金松 あいつ。今うまるやるいッ？

三良 うう？うう…。

金松 早く行ち見しらに…

三良 （仕方なくオミトの所へ向かう）

〈へいりく枕・殿様節〉

三良 シサーサヘイヘイ。此処いちゆた、いちゆ
た。アバ小名や、何んでい言ちようが。と
お早く聞かち呉り。

オミト 何んでい言がなあ。名乗いる程ぬ者やあい

びらん。

三良 あねー言なけえ、えーアバ小。彼処あまにめん
せる御旦那ぬ、達ていぬ願えどうやる。くぬ
際や、どーでいん汝名聞かちとらせえ、とお。
シサーサヘイヘイ。

オミト あんどろんやりば、御云うんぬきら。嘉手納屋良
村ぬウミトウんでいいち、我ねえ言ちよー
いびん。

三良 ウミトウんでいなあ。容貌姿かあぎとういつペー
相応うちやとおせえ。シサーサヘイヘイ。ウミトウ
小よ、ウミトウ小。先程や果報しどーやあ。
いつペー助かどーさ。御旦那からん御褒美
取らすさ。一時いちゆたしくま此処寄てい来う。シサーサ
ヘイヘイ。

オミト 何んでい言がなあ、えー貴男うんじょう。御褒美受き
ゆるあた値ぬ事や我ねしちういびらん。どー
でいん、此ぬまま御仕事続きていうたびみ
そり。

三良 ウミトウ小よ。ウミトウ小。汝や、未だ差なあ
し分け付かん童どうやてーさやあ。私達御
旦那、汝くとう見染みてい語れ欲さあむぬ。
シサーサヘイヘイ。とーとー、ウミトウ、
ウミトウ小。御旦那ぬ側に寄やい話物語い
ん愛々とう小、たつくわいむつくわい花ん
咲かすんでえ。シサーサヘイヘイ。

オミト 此れえ成らんさ。えー貴男うんじょう。我にんかいや、
名付きらつたる阿兄小ん居いびいくとう、
聞かんたんでい思てい我ねえ御無礼さびら。

オミト急ぎカゴに洗い物をおさめ、
足早に下手へ去る。

（台詞）

三良 えー。待てえ。ウミトウ。待てーんではいる
言っさみッ。

三良 （恐る恐る金松に）御旦那さい。ちゅらーさ、
逃ひんぎらつていねーやびらん。

金松 此くひゃぬ奴ひゃーや。何ぬ役ん切り立たん。

金松、三良にめえ拳骨こーきを一発。
うなだれる三良。

〈敷島煙草〉

金松 敷島煙草や点き安むん、嘉手納屋良村美童
ウミトウや、落とうし至ぐり難さ。くり迄、我
にんかいなびかたる、女ぬ居まあたんなあ。
何まあ処にん居るさくい情ちりやから。美さる
花やよう無蔵よ。眺みるだきやりば、恋尽
金松うぬ名ぬ立ちゆみ。くぬ際や、如何ちゆぬ様
な手使ていん落とうち見しら。

（台詞）

金松 三良よ。三良。

三良 ふーっ。何でーびるが、御旦那さい。

金松 急ぢあぬ女ぬ後追てい、名付きらつとーん
でいいる男探とらめーい出じゃち我にんかい知ら

しいる如。

三良 えーさい。御身ねえ首里んかい、妻子ん居

いるさびーる。必なじ選び選び、あんし相

良さる田舎アン小に巻ちぶいんでいい

せえ、酷すかーあいびらに。名付きらつとー

る男ん居いどうさびーるむんぬ……。

金松 何んでい言うが、三良。くぬ金松、くり

以上でいぬ名折りぬ有み。とー、急ち通れーッ。

三良 ……。

金松と三良、急ぎ下手へ退場。

第二幕

カマデの家。夕方。

カマデの母親ナベ（42）才が、

咳込みながら繕い物をしている。

そこへ、野良仕事帰りの

カマデが下手から登場。

（台詞）

カマデ あんまあ。縫い物んどうしみせーんなあ？

ナベ あい。カマデー。戻てい来ーさやあ。

咳込むナベの

背中をさすりながら

カマデ あんまあ。どうく無理やしみそーんなよお。
ナベ ちけえ無えんさ。だあ、夕飯支度すがいんさんどー
ならんむん。

立ち上がるうとしてくずおれるナベ。
慌てて支えるカマデ。

カマデ あんまあ。あんまあさい。

ナベ 心配さんていん済むさ。うぬあたいや、何
んあらん。立ちくらみさるうっぴるやる。

カマデ あんまあ。夕飯のお我が支度したくさびーくとう、
御身うんじょう此処ゆくんかい休ゆくとーちみそーれえ。

ナベ 何んでい言が、汝や。畑仕事んならん。外

回いん叶あん。うぬあたいんちよーさ
んでえ、生ちちよーてい何すが、ゆう価値ちらい
無えらん。

カマデ あねえ言みそーらんけえ、あんまあ。今日
ぬ所や、我がさびーくとう。

ナベ あい。ちけえ無えらんどーんでえ。

二人押し問答しているところへ、
畑の地主（51）才が上手より登場。

（台詞）

地主 へい。此処いちゆた。

カマデ あい。地主ぬ前さい。

地主 はい。カマデー。常時ちやーちば気張いやるむんなあ。

カマデ うう。御身うんじゆん胴頭丈御歩ちみせーびーみ？
地主 いい。私達むむん、全然むむ変わらんぐとう歩つ

ちよーんどお。

カマデ あい。だあ、今茶小淹なまつていちやーびら。

地主 あらんあらん。済いむさ。すぐ失礼いすぐとう。

カマデ あんやいびーんなあ？

そこへ辺りを窺いながら、

三良がそろりそろり下手から現れる。

地主 カマデーよ。汝が朝夕さ思頑張いくとう、

作る毛にへえ作いん良う出来とーんねえするむんなあ。

カマデ 二拝にへえでーびる。

地主 やしが、くぬ所畑ぬ地代が遅りとーんねえ

すしが……

カマデ ……。

地主 誠小うしろんち評判立うしろつちよーる汝が、滅ばすん

ちえー思あのーあしが、如何なとーがん

でい言ち問いがる来んでえ。カマデー。

カマデ ……。

何だか厄介なところへ

来てしまったと困惑する三良だが、

推移を見守る事に。

地主 我やていん、いつ達屋家庭やちねぬ事考えてい、

くり迄延ばさりーるうつさー延ちやびてい来る

くとうやしが……。

カマデ 地主ぬ前さい。うぬ事に就いてえ、我にん
いつペー果報しんでい思とーいびーん。

地主 汝気持ちや良う分かとーさ。やしが、くり
以上延びららん所迄来^ちるうんでえ。カマデー。

カマデ ……。

地主 全部^{むる}んでー言らんさ。半分やていんしむく
とう、如何がなならに？

カマデ うう？うう……。

地主 汝やていん苦痛^{くち}さんでー思いしが、私達事
情ん察してい、気張ていとうらせえ。

カマデ ……うう……。成いるうっぴや気張てい
なーびーさ。

地主 頼だんどーやあ。カマデー。

カマデ うう……。

地主 上手に去る。

気落ちして見送る二人。

着物の袖で涙をぬぐうナベ。

その親子の様子を見て、

不憫に思う三良。

〈あんまあ〉

ナベ 我が身体弱さぬ、何時ん迷惑掛きてい。

結婚^{すがい}支度^{すがい}ん自由^ま成らん。ウミトウ小始め、

主んあんまあにん申し訳ぬ立たん、肝暮り

ていいちゆさ。産し子よ、産し子。あんし

哀りさぬ。

カマデ 其れえ心配ねえ及ばん。私達^{ちねえ}家庭ぬ成り行

ちん理解^{わか}たる上に、明きてい春来りば嫁に

なゆんでい、いい返答小持たちあるむんぬ。
二人し孝ん果たさびら。あんまあ、あん

まあ。何ん心配しみそーんな。

ナベ
汝が思頑張はまてい幾ちやつさ働ちん、手間小や菓
代に消い果ていてい、畑ぬ地代ん払ゆうさ
ん。此ぬまま長らいてい居ていん、手枷足
枷なるばかい。産し子よ、産し子。くぬ母
許ち呉り。

カマデ
何んでい言みせーが、情え無えみそーらん。
六才ぬ年に主が逝はいみそーち、難儀困義ぬ
果ていぬ事でむぬ。あぬ世先立ちやる主ぬ
分迄ん、あんまあ・あんまあ、長命願やびら。

(台詞)

カマデ とーさい、あんまあ。ありくり物考えしみ
せーねえ、身体んかい障さいびーくとう、何
ん心配しみそーんなけえ。何事ん誠尽くち
思頑張はまいどうんせえ、如何がな成いどうさ
びーる。

自分の不甲斐なさを嘆き

涙にくれるナベを慰めるカマデ。

そのやり取りを見て

気の毒に思う三良なのだが、

本来の目的を思い出し

カマデにしきりと合図を送る。

それに気づいたカマデを手招きし、

何やら耳打ちすると、
二人して下手に消える。

《地謡・子持ち節》

泣くがなし泣ちん聞く人や居らん
共に泣くむんや山ぬひびき

我が子の不憫さに、
胸が張ち切れんばかりのナベ。
ただ涙が溢れるばかり……。

《地謡・トゥバラーマ（曲のみ）》

苦悩の表情を浮かべ、

カマデが下手から現れる。
オミトに横恋慕した金松が、
小作料や母親の病気の治療代を
肩代わりしてやる代わり、
オミトと縁を切れとカマデに
迫ってきたのである。
しかもこの事は、
オミトを始め外の者にも
口外してはならないという事が
絶対条件だと言う金松。
カマデの足元を見ての卑怯な提案を、
すぐにはねつける事も出来ず、
足取りも重く戻って来たカマデ。
事情を知る由もないが、

その落胆ぶりに為す術がないナベ。

（暗 転）

第三幕

オミトの家。

金松の策略とも知らず、

カマデの突然の心変わりに、

嘆きのあまり

床に伏せてしまうオミト。

看病に明け暮れる母親のツル（40）才。

（台 詞）

ツル とー、ウミトウ。鯉湯かちゆー作ていちえーくとう、

起きてい少小いひひやていん飲でいとうらせえ。

オミト （力なく首を横に振る）

ツル うぬカマデーや、情え無えらん。私達ウミ

トウ、あんすかなー病気やんめー者なち……。

常日頃ひーじーから、あんし誠まゝな者や何処まゝにん居ら

んでい言ち沙汰さたんさつとーたぐとうる、私

達ウミトウ小とう名付なづけきーんさる。くりん

かい此ぬ様な仕打しうちち受うきーんでえ、夢ゆめにん

思おもあんたさ。余程ゆふどぬ事情じじょうが有あていぬ事ことん

でー思いおもしが、何故なげんでいちがかなたら

…。

〈白浜節〉

ツル 汝なや肝かん狂きやうりてい、食くむる物もの食くまん。ムシル

とう一―ちなてい、物んちよん言らん。あ
いえー私達ウミトウ小よお、あんし哀りな者。

この時、父親の太良（43）才が
家の奥から姿を現し、

二人のやりとりを黙って見ている。

オミト 阿兄小や情無ん恋尽がやたら、夫婦約束ん
仇になすみ。生まれらん先からぬ悪縁がや

ツル 頼たんでいウミトウ小。父母ぬ為に、肝強―く
持たつち起きてい給たり。自由まならん縁やりば、
切きつち捨ててい呉り。

オミト 我や季節しち知らん、蕾花でんし。花咲かんう

ちに枯りていねらん。あいええ我ねえ如何
すがや―なあ、闇夜心気。

オミトが床に伏せるようになった
事情を知り、怒りに震える太良。

〈口説〉

太良 あらん何んてい言いが、私達ウミトウが、
ヨ―ガリ病やんめ気者いむんない果はていたしや、カマ
デーに捨ていらつたる故どうやんでい言ん
なあ。幼少くさうさる頃ばすから、家人やい数ぬ扱あえしち
どう大人なたる。うぬ恩義忘りていくぬ仕
様、許いち許ちさらん。義理恥いんゆ覚いていどう、
生虫いちむしどう同丈いんんでい言ちぬ言葉あるたみ

し。今しぐ飛んじ行じゃに、胴骨折ていとうらさ。

今にも飛び出そうとする太良を
必死で押さえるツルとオミト。

(台詞)

太良 此処放し。放しんでいる言つさみッ。

ツル えーなあ、主。少いへえ落ちてい着ちみそーれえ。

太良 此りが、落ちてい着ち居らりーみッ。くぬ奴ひゃ

あカマデーが、近頃や見いたる影むるん全然

無えらんしが、何故んちがやらんでい思

れえ、此ぬ様な事ばすなとーたる訳い。

二人 ……。

太良 いつ達あん、いつ達あやさ。二月なーなる

ツル か、我にんかいや一言葉うん聞かさん。其うり
分わかいてーれー、只あ逃あうらさんたるむん。
とお、其うまやいびーさ。

太良 ?

ツル 御身うんじゆんかい此ぬ事が知りーねー、カマデー
が一大事ないんでい言ち、ウミトウがる主
んかいや決してい知らちえー呉るな、ん
でい此ぬ我にんかい、涙落とうち頼どーる
ばーるやる……。

太良 何んでい言がッ。捨ていらつていんなー
んあらん、ありが心配すんでいなあ、
我子わらびツ。汝ぐとあ如おるむん。

思わず、オミトに

手をかけようとする太良。
それを止めようとするツル。
揉み合っているところへ、
風呂敷包みを手にした金松が、
下手から現れる。
その只ならぬ様子に驚き

（台詞）

金松 何が、何事やいびーがさい？

三人 （驚く）

金松 ひいじー日頃とうや、様子ぬ違とーんねえすしが

……。

三人 ……。

金松 あんまあ。何がな有いるさびーるい？

ツル ……金松ぬ前たい。何ん有いびらん…。

金松 あねえ言やびーしが、大分様子変わいやん

ねーさびーんどお。

ツル 何ん有いびらん、私達主小が、多少短気者

なてい……。

太良 何う？

ツル なねえ無えらん事んかい、腹立ちそーる

うっぴどうやいびーる。

太良 （怒り）何やんでいが？

ツル あんどうやいびーんどお。やあ？主小。

（目配せ）

太良 （仕方なく）あんさびいくとう……。年や

寄ていん、くぬ気性がー直いびらん。厄介

なとーいびーさ。

金松 はーなあ、主よお。短気腹立ち怪我ぬ源ん

でい言やびーんどお。肝忍持ちみそーち、

長命見ーじみそらんねえ。貴男がる損さ

びーんどお。

ツル やんでいんどお。主小。

太良 （小声で）此ぬ奴あや。

金松 いーとーとー、今日やくぬ酒小召上やーに、

肝取り直しみそーれえ。

包みから酒を取り出し、太良に手渡す。

元来酒好きな太良は、

相好を崩しながら受け取る。

金松 （ツルに）甘物上戸うぬあんまあ為に、今

日やタンナファクルー持つちちえーびーく
とう、茶小淹つてい召上いみそーれ。

ツル あきとーなあ。今日ん御馳走さるうちやい

びーさやあ。（受け取る）

金松 うりから、三良に言付きてい田魚捕獲み

ていちえーびーくとう、煎じやーにウミ

トウに飲ましみそーれえ。

ツル 何から何までい考えていとうらしみそー

ち、いつペー果報しな事でーびる。やいびー

しが……。

金松 ん？ 何が、何やいびーがあんまあ。

ツル ……。

太良 やいびーくとう、此りが言い欲させー、あ
んし毎日毎夜くぬ様な土産物頂ちん、私達

如おる田舎者ねえ、何一―ち御返しする事
や成いびらんしが、如何され―しむがや―
んでい言ち、二人なむん頭押すと―る訳ど
うやいびーんでえ。

金松
何んでい言がなあ、主。うぬあたいぬ事し
……。

太良
あねえ言やびーしが……。

金松
我仕事んかい、なくて―ならん大切な凶面、
ウミトウが自分ぬ着物ぬ濡濡だすし厭わ
ん、捨ていとうらちやる御陰にる、何ぬ障
いん無えんぐとう仕事ん遂み―る事ん成た
る。言いね―ウミトウや、我にとつて―恩
人どうやいびーるむんぬ。

父・母
……。

金松
うぬあたいぬ事や、何んあいびらんさ。どう
く深く物考えやしみそ―んなけえ。

太良
あん言ちとうらしみせ―ねえ、多少肝ぬ軽
くなと―んねえさびーん。二拝で―びる。

金松
とお、あんまあ。美味茶から淹つていとう
らしみそ―れえ。

太良
やさ。田魚ぬ煎じ小ん早くなあ作てい、ウ
ミトウんかい飲まさんで―ならんえ―さ
に。

ツル
あんし―ね―、御言葉んかい甘えと―ちや
びらう―。

金松
（うなづく）

太良とツルふたりして、

氣を利かすように奥へ去る。

金松　ウミトウ。今日ぬ気分や、如何ちやなとーが？
オミト　……。

金松　汝やなあ、あんし長患いしーねー、主・あ
んまあん心配しみせーんどお。(オミトの
たちち手を取り寢床から連れ出す) 二月たちちなる間ム
シルとうーていちなてい……。とお、今から
やていん食むる物ん食でい、煎じ物んうち
飲まーい、ハシツとうさんねえ。

オミト　……。

(海やから)

金松　あねる男に惚りてい、食むる物食まん。色

抜ぎてい瘦し果ていていー哀りウミトウ
小。我が思いしドンドン、涙止みてい見
しら。為なていん為らりらん、縁無ん者ぬ妻
や。思切らねなゆみ悪魔男。浅まし者ドン
ドーン、罰加あちとうらさ。縁が有ていか
らや、切りてい行ちゆみ無蔵ゆ。結でい結
ばらん悪縁とう思てい、今日限り打ち忘
てい語ら。

(台詞)

金松　ウミトウよ。あんし簡単に切りーんでい
せー、あぬ男とうや天ぬ定みたる縁あらやまた否
ん。汝とう我とうる神ぬ御代さだみから運命さだみらつた
る縁どうやるんでいち、我があ思いしが汝や

ちやー
如何思いが？

オミト ……。

金松 肝強く持つち早くなあ良^ましなてい、話物語

いんしんだな。

オミト ……。

金松自分の打ち掛けを

オミトに掛けてやり、

優しく肩を抱き寄せる。

（暗 転）

第四幕

オミトの家の門の前。夜半。

カマデが人目をはばかりながら

下手より登場。

病に伏せるオミトの様子が気になり、足を運ばず

にはいられないカマデ。

中の様子を窺いながら

（台 詞）

カマデ 許ちとうらしよお、ウミトウ。ムシルとう

——ちなとーんでい聞ちやしが、強う当た

いあらんでーしむしが……。

ひとり気を揉んでいたのだが、

人の気配を感じ、

急いで木の蔭へ隠れる

そこへ、金松が打ち掛けで顔を隠し、
下手より登場。

《地謡・仲風節》

暮さらん忍でい来る
御門に出じみそり思い語ら

金松、切なく忍びの舞い。
舞い終わるとおもむろに、
オミトを誘い出す。
しばらくして門をそつと開け、
オミトがはにかみながら姿を現わす。
駈け寄る金松。

(台詞)

金松 ウミトウ。汝や、人待ちかんでいしみてい……。

オミト ……。

金松 やしが、なあ済むさ。くぬ如し出じてい来^ち
果報し。くぬ日が来^{ちゅ}うし幾^{ちや}つさ待ちかん
ていさんでい思いが？

オミト ……。

金松 ^{なま}今迄ぬ事考えいねえ、夢ぬ如どうある……。

《地謡・あだ花》

結でい重にたる赤糸ぬ御縁

神ぬ御代からぬ玉ぬ運命

通わちやる情織い成ちえる布や

ふた心知らんまくとう紺地

曲の間、まだ揺れ動くオミトを、
必死で説得する金松。

為す術もなく、
気の陰でうなだれるカマデ

〈世界報島沖繩〉

金松 愛し思無蔵よ。縁結ぶ節ん有いがすらとう

思てい、肝暮りてい居たん。朝夕さ神御願え

よ。しちやる御陰に願た事叶ていよ、縁結

ぶ嬉さ。縁結ぶ嬉さ。

オミト

貴方首里ぬ侍、我身や田舎育ち。釣り合わ

ん者や不縁ぬ源とう他所や語いしが、神か

きていぬ契りあの世迄ていしや、誠やみ里

前。誠やみ里前。

金松

何んでい言うが無蔵よ。神仏頼でい契り

しゃる我肝ぬ、ふた心持ちゆみ。太陽ぬ西

から登てい東に落ているとうん、変わる事

無さみよ、一期何時迄ん。一期何時迄ん。

(台詞)

オミト

今ぬ云言葉や、誠真実んでい思てい宜さい

びーがやあ？

金松

何んち我が、汝んかい偽い事言いが。肝か

ら心から、思とーくとうどう言やりーる。

はにかみながらも、ようやく

納得の笑顔を見せるオミト。

優しく抱き寄せる金松。

胸を引き裂かれる思いのカマデ。

《地謡・仲里節》

やっど心を開いたオミト。

金松と愛々かながなと踊る。舞終わると

二人して打ち掛けで顔を隠し、

下手に足早に去る。

木の蔭から飛び出して来たカマデ。

暗澹たる思いでただ二人を、

見送るしかないのであった。

第五幕

半年後。

道行姿の金松と三良が上手より登場。

首里から長男誕生の知らせが届き、

オミトにひと言も無く

急ぎ旅立とうとする金松。

それは、あまりにも情が

無さすぎると物申す三良。

〈せんする節〉

三良 えーさい、御旦那待ちみそーり。ウミトウ

小に一言葉ぬ伝しえいんさんぐとう、首里ん

かい戻いんていしや酷どつくあらに。名付きらっ

たる阿兄小とうぬ仲ん引ち裂ちやーい、手

に入つたる花どうやる。センスルセンスル

ヨーセンスル。

金松 何んでい言がひゃー、三良よ。旅ぬ上ぬ事

どうやる。仮染みぬ花どうやる。我が子ん
引ちよーるむぬあらん。首里ぬ妻が長男ちやくし
誕生もつきたんでいち、知らしぬあていどう我ね
行ちゆる。一足ん速みてい行きわるやる。

三良 じんとー情無えらん。私達如おる者やていん、
踏くだみりば痛みるする。赤さる血ん流りゆる。
くぬ際や御旦那さい、どーでいんたつた一言
葉ぬ、云い言えい残ちうたびみそり。たんでい
情ぬ一言葉ん……。

(台詞)

金松 あぎじえ。此処くまうてい何戯戯じやじやぐとう言
ちよーが。早くなあ、通ーいみしらにッ。

三良 (足を速める金松に) 御旦那さい。御旦那さいッ。

三良の進言にもかまわず、
ますます足を速め下手へ消える金松。

三良 うっさサーヨークラーヨーしんなーんあら
ん、思とーる阿兄小とう ぬ仲ん皆無うみーく
なち、半年ぬん自由じま染みなち置ちきていか
ら、うっちゃん投げーんでい言せー、酷どか
らあらに。(ため息) 御旦那ねえ、私達
如おる青葉千草民百姓や、人なてー見いら
んがあら……。あんし、「(連らね) 添わん
ありば離別わかりるや必定たみし、恨み無んぐとうに
美らく切りり」んでい言ち、歌にん有いる

する。じんとー情え無えらん。あいえー。
ウミトウ小や、またムシルとうーちなた
るうちやさやあ。（上手に向かつて）ウミ
トウ、許ちとうらしよお。強^{ちゆ}—当たあいさん
けーしむしが……。

金松の理不尽な振る舞いを

胸で詫びる三良。

気を揉みながら、後ろを（上手）

振り返り振り返り下手へ退場。

第六幕

オミトの家。

何の断りも無く、

突然首里に戻ってしまった金松に、

再び失意の日々を送るオミト。

憔悴しきったオミトを、

何とか立ち直らせようと

母親のツルは心を砕く。

父親の太良も、何も手に付かず

ただ二人の周りを

オロオロするばかり。

《地謡・あだ花》

幾春ゆ経ていん変わるなよ互に

飽かん云語れや夢がやたら

甘口や一道我胴や染みなちよてい

あきよ思里や浅地心

(台詞)

ツル ウミトウよ。汝があんし「アーアー」しー
ねー、あんまあや如何ちやされーしむが……。

オミト ……。

ツル だあ。主心配し、仕事むるん全然手ーに付か
んせー。

太良 我んくとー何やていん済むさ。えーウミ
トウよ。汝ちむいやなあ、生身とうまとう生涯、あんそー
ちゆる心算いちみいどうやるい。

オミト ……。

太良 主やていん、出来ないるむんやらー首里んかい
行じ、里之子探とうめーい出じやち、何とう此くいー

とお裁断ぬん分かし欲さんでい思とーん。
やしが、私達百姓ぬ位ぬ幾ちやつさ思たんでー、
叶あん事ん有ん。やくとう、くぬ際あ及ば
らんたんとう思てい、頼やすでい諦んじてい
とうらせえ、ウミトウ。

オミト (たまらず泣き崩れる)

娘の不憫さにいたたまれぬ父と母。

この時カマデが、木の陰から
心配そうに様子を窺っている。

〈なーしび節〉

ツル あきよ我が産し子。及ばらん里に、恋ぬ橋
掛きてい焦がり泣ちゆみ。

オミト あんまあ。くぬ我身や何ぬ罪ぬ有とてい、
かねる罰当ていてい道迷いしみが……。

下手から、
三良が恐る恐る顔を出し、
親子のやりとりを
気の毒そうに見ている。

ツル 汝に罪ぬ有ゆる道理ぬあゆみ、産し子・真
心尽くちん、踏^{くだ}みる人や居るたみし。

オミト 阿兄小ん思切やい、仇し縁ぬ里とうあだ花
や咲かち、闇に散り果ていてい……。

あふれる涙を抑えきれないオミトに

(台詞)

ツル 何時までいん、里之子ぬ事思ていムシル
とうーちーないねえ、汝がる損ないん
どーやあ。

太良 やさ。汝が、此処うてい幾^{ちや}つさ泣ちゲーゲー
しん、ありが戻てい来うるむぬんあらん。
くぬ際や自分ぬ為んでい思てい、諦^{やす}んじー
る事やさ。

連らね

オミト かにん苦りさあらば
何故でい引逢わすが
神仏居らん闇夜心気

ツル 恨みていん如何すが

泣ち明かち如何すが

変わていいくむぬや人ぬ心

それでも、

涙せずにはいられないオミト。

一部始終を見ていた三良が、

やがて、意を決したように、

親子に近づく。

それに気づいた太良が、

飛ぶようにやって来て

三良に掴み掛かる。

今にも殴りかからんばかりの勢いに、

慌てて止めに入るツル。

掌を合わせ、しきりに謝る三良に

（台詞）

太良 汝あ如おる者、ゆう此処んかい来うらりー

たんやあ、まじ。

三良 何んでい言らつていん、返えす言葉ん無え

やびらん。やいびーしが、どーでいん我が

言いしん聞ちとうらしみそーれえ。

太良 今でいーから、何んでい言いくわいがツ。

再び掴み掛かろうとする太良を、ツルが押さえて

ツル えーたい。少え落^{いへ}てい着ちみそーれえ。此

ぬ人やていん、如何しん肝^{かんむう}要な用事ぬ有

ていどう、あが遠首里からわざわざ来とう
らちやる筈。話や聞ちから、何とう此くーとお
裁断ぬん分かしみそーれえ。

太良

……。

ツル

とお、今ねえ汝話んでいし、聞かちとうらせえ。

三良

……。 (言いあぐねている)

太良

早く喋あびらにツ。一体何事ぬ有てい、私達

一人女ちゆいん子かんし道迷いしみが!!

三良

……実えよーさい。私達御旦那ねえ、首里

んかい妻子ぬ居てい……。

オミト

(驚く)

太良

何やんでいがツ。妻ん子ん居るむんぬん私

達ウミトウとう、染みなちやんでいる言るいツ。

三良

……う……う……。

太良

此りや、許ち許さらん。(怒り心頭)

三良

(太良の剣幕に腰が引ける)

ツル

(話を続けるよう促す)

三良

……うう……。実え女ん子ぬ一人や居い

びーたしが、長間男なげーさん子当たいる事ぬなら

ん、父君たーりーあやーん母君はん目禿はぎ待ちかんていー

そーいびーたしが。

三人

……。

三良

貴方うんじゆな達ん分かみせーる筈やいびーしが、佳

かつ人ちゆぬ家ぬ一人男ん子んでいせー、後

継なち産さんだれー此り以上いしていぬ心労や

無えやびらん。

三人

……。

三良

やいびーくとう此ぬ間、首里ちやくしもうきから長男誕生

たんでいぬ知らしぬ届ちやくとう、跳ん
じやー舞かーし急ぢ戻ていねーやびらん。

オミト
（うなだれる）

ツル
あんし、私達ウミトウに一言葉ん伝言いさんぐとう、
行ちやんでいる言いなあ。汝や……。

三良
うぬ事に就いてえ、我にん幾度ん伝言持
たしみそーりんでい言ち御願えんそーい
びーしが、子引ちよーるむぬんあらん
でい言ち、聞ち入ってーとうらしみそーら
ん……。

太良
何がひやー、私達ウミトウや子産し者う
どうやるいッ。

三良
……。
ツル
半年ぬん染みなち置ちきてい、うぬあたい

ぬ情ん無えみそーらんでいいしや……。

（涙ぐむ）

三良
ウミトウ小ねえ、本当済まんてい思てい肝
ぬ忍ばらんぬる、我にんかんし寄しりてい
来ーいびーる。

ツル
（うなづく）

太良
侍んでいいせー、私達如おる民百姓や、か
んしる扱ていとうらすさやあ。

三良
我にん、百姓ん侍ん同ぬ人間どうやる、踏
みりば痛むい赤さる血ん流りているうい
びーるんでい言ち、掴い縋いんさびたしが
……。（首を振る）

やるせなさにしばし全員沈黙。

やや間があつて

三良 あぬう……主よお

太良 ん？

三良 言い苦りさああいびーしが、其りだけえあ
いびらん……。

太良 其りだけえあらん？ 外にくり以上ていぬ
事があんでいる言るいッ。

三良 うう？ うう……。

太良 あししヤッ。早く言いみしらにッ。

三良 実え、カマデーぬ事どうやいびーしが……。

太良 カマデー？

オミト (顔を上げ、三良に目をやる)

太良 ありが事や、聞ちちやくん無ーらんッ!!

ツル あねー言らんぐとう、聞ちどうさびーる。

何が？ カマデーが何やが？

三良 カマデーねえ、じんとう申し訳が立たん事
しねーやびらん。

三人 ？

気の陰から様子を窺うカマデ、

気が気でない様子。

三良 実え私達御旦那ぬ、ウミトウ小^{ちゆみー}一目見ーち

しぐ満惚りしみそーち、話物語いんしー欲
さんでいちさびたぐとう、我にんかいや名
付きらつとーる阿兄小が居くとうんでい言
ち、ウミトウ小んかいちゆらーく断らつ

とーいびーんてえ、まじ。

……。

三人
三良 さくとう此ぬ御旦那ぬ前や、しぐに諦みー
ねえ美らむんやいびーてーしが、恋尽金松
ぬ名折れどうやるんてい言ち、カマデー探^{とうめ}
ーい出じゃち、談判始めてねーやびらん。

太良 談判？

三良 うう。

ツル 何が？ カマデー相手に、何ぬ談判する事
が有が？

三良 実えよーさい。畑ぬ地代んあんまあ葉代ん
全部^{むる}我が払いくとう、ウミトウとう縁切
やーに、此の事や決して い他言せーなら
んてい言ち（言い終わらぬうちに）

太良 何やんていがッ。

オミト （まるで信じられないという表情）

太良 汝が今ぬ話、誠真実やみ？

三良 うう？うう……。

オミト （泣きだす）

太良 （怒りに震える）

泣きだすオミトに

胸を搔きむしられる思いのカマデー。

ツル ……里之子や、情え無えみそーらん。あん
し誠な者に此ぬような話持ち出じゃち、カ
マデーやちやつさが苦痛^{くち}さたら…。

三良 うり考えーいにねえ、我ねえ今^{なま}ん肝ぬ痛ま

びーん。カマデーん、幾日ん考えてい考えてい考えてい上ぬ事んでい思やびーん。

……。

三人

太良 地代ん払ゆーさん。手間代や全部薬代むるに充あていてい、此ぬまま長らいて居ていん、カマデーぬ手枷足枷なるだきるやるんち、あんまあが泣ちみせーくとう……。（涙ぐむ）

ツル 女ぬ親んでいいせー、子ぬ重荷ないんでいしが何やか苦痛さるある。あんまあん、肝苦しい者やさ……。

オミト （泣きながら） あんまあよ、あんまあ。我ねえ、うぬ様な事情ん知らん、里之子ぬ甘口に騙さつてい……。

ツル （背中を撫でさする）

オミト 阿兄小胸内ん知らん、我がしー出じや

ちえーる事や、神仏ぬ罰当ていらつてい何ぬ不思議ぬ有が、あんまあ。

ツル あねえ言らんぞお。汝一人が悪つさるむぬんあらん。

オミト あいびらん。我がる悪つさいびーる。今どうなてえ、阿兄小に申し開きする事ん叶あん。我如おる者や、死ぬしるまשיやいびーる。

それまで、胸を痛めながら
成り行きを見ていたカマデが、
激しく自分を責めるオミトの姿に
いたたまれなくなり、
木の陰から飛び出しオミトに

〈あやぐ〉

カマデ ウミトウ小よ、ウミトウ小。汝ねえ何ぬ罪
ん無えらん、我がる全部悪むるつさる。やく
とう、自分どうくる自分責みすしや、頼たのでい止
みてい呉り。

オミト あいえー、阿兄小。くぬ我身やうぬ様な事
情ぬ有んていし夢にん思あん、あだ花や咲
かち、神仏ぬちゅらーさ罰当たてい……。

カマデ 何んでい言がなあ、オミト小。元から言
ねえ、我がる悪つさる。私達あんまあぬ病やん
気治めする銭に目が眩めでい、汝にくぬ仕様、
許ちとうらせえ。くぬ通ーいやさ。

（頭を下げる）

オミト 阿兄小。どーでいん止みてい呉り。我身ぬ、
如何し阿兄小責みる事ぬないが。ちやぬ様
な事情ぬ有ていん、他所とう過ち有むぬ。

カマデ ウミトウ小よ、ウミトウ小。（オミトの手
を取り）互えに道迷いしちやる事やしが、
今から後や水に流ち、二人ぬ縁ぬん結び直
ちとうらせえ。くぬ我からぬ達ていぬ願えやさ。

（台詞）

カマデ 許ちとうらしよお。ウミトウ。

オミト 阿兄小ん、本当我くとう許ちとうらすなあ？

カマデ いい、あんせー。私達あんまあんかいん、
人ぬ道外はんりていまでい長命見ーだんていん

済むんでい言ち、したたか怒らーらつたせえ。

オミト あんまあが、あん言みせーたんでいなあ？

カマデ （うなづく）

手を取り見つめあう二人に

安どの表情を浮かべる父母と三良。

太良 良う言ちとうらちちゃん、カマデー。此ぬ様

な事情ぬ有んでいちん全然分むるからん。汝ん
苦痛さたる筈、堪くねーていとうらせーやあ。

（頭を下げる）

カマデ あいびらん。元から言いねえ我がる悪つさ
いびーくとう、どーでいん頭上げていうた
びみそーり。

三良 カマデー。汝ねえ本当悪つさる事しちゃん

でい思てい、今日迄肝痛みそーたさ。許ち
とうらしよお。くぬ通ーいやさ。

（頭を下げる）

カマデ 貴男うんじゆまでい、止みていとうらしみそーれえ。
第一、貴男うんじゆがいめんそーらんだれえ今なまちき
てい、かんしウミトウとう、言葉交わすし

ん叶あんたる筈でーむんぬ。

太良 やさ。汝くが来ーんだれー、私達いちみや生身いぢみとう
生涯とうまくさ後あ向くつちゆうそーたる筈。

三良 やいびーがやあ。

ツル やいびーんどお。貴男うんじゆぬ御陰ちやどうやいびーる。

三良 あん言らりーねえ、我ちややていん来る甲斐ちやが
有いびーさ。

誤解が解け、全員喜びの表情。

ツルがオミトの手と

カマデの手を取り合わせ

〈忘れてーならん子守唄〉

ツル カマデー。じんとう許ち呉り。汝が誠な者

んち知りなきな、此ぬ仕様恨でいうたさ。

親ぬ孝んすんでいいちどう入ららんみーに

入っち、自分一人肝痛まち暮ち居たみ。

太良 昔言葉に有る通ーい、人んかい撲らつてー

寝んだりーしが、人撲てー寝んだらん。

自分ぬしちやる事自分くる責みてい、ウミ

トウとう同くとう汝ん苦痛さる夜ん明か

ちえーさやあ。

ツル

人間生まり落ていりば、上下ん一旦ぬ過ち

やあいるする。肝広く許すし肝要。夫婦に

なりば他所肝や持たんぐとう、何時ん共に

歩でい踏み迷んなよ。忘んなよ、忘らんき

太良

うりから約束義理恥ゆ尊重んじりわる世ぬ

中丸く治まるたみし。幾つさ時代ぬ変わる

とうん、人間ぬ良し悪しや情ぬ深さとう誠

一ち。忘んなよ、忘らんきよー。忘れてーな

らん人ぬ道や。

（台詞）

ツル

とお、今ねえくり迄ぬ事や水に流ち、一日

ん早く夫婦んだになやーい愛々とう暮すしやさ。

互いに見つめあい、
うなずくオミトとカマデに

三良 したいさい。今やいびーさ。（拍手）

太良 あんまあが語る通い、一旦ぬ過ちや誰にん
有いるする。互えに赦ち、前んかいあがち
行ちゆしどう肝要やる。二人し命限り頑張
てい、親の孝ん果たすしやさ。あんまあよ。
早くいい日選でい結婚しみらんねえ、また
何が有ら分からんどお。

オミト はっさなあ、主よお。（ふくれる）

太良 （笑い）冗談ていふあどうやっさみ。冗談。

誤解が解け、お互いを赦し、

縁を結び直すことを誓う

オミトとカマデ。その姿に、

ひさしぶりに笑顔があふれる。

そして、寄りそう二人に、

母親と父親の連らね。

連らね

ツル 仇花や咲かち

枯りてい落ているとうん

またん春来りば

花勝い咲ちゆさ

太良 誠積む人に

光無んうちゆみ
天とう地ぬ神や
見ゆらでむぬ

—
幕
—